John C. Berry 研究序説

長 門 谷 洋 治
NAGATOYA YOJI

は し め に

John Cutting Berry 1847—1936 別麗、別礼、ベリー、ベレー（以下Berry）は明治5年（1872）来日し、明治26年（1893）まで、神戸、岡山、京都などにおいて、医療と伝道の他に、看護教育、監獄改良、社会事業、公衆衛生など幅広い活動を行ない、明治初期のわが国に大きな影響を及ぼした米人の宣教医 Missionary Doctor である。ここに彼の生涯を簡略に記し、いささかの考察を加えたい。

Berry 略伝

1 来日まで

John C. Berry は1847年1月16日、アメリカ Maine 州、Sagadahoc 郡、Hipsbrung で生れた。18歳で教会に入り、聖職につかんとしたが、演説の才能に恵まれていぬと思い、聖職と同じ程度と思われる医術の研究と実行に志し、Monmouth Academy を経て、Maine の医学学校および Jefferson 医大に学び、後者を1871年に卒業。ちなみにJefferson のあつたPhiladelphia ないし Pennsylvania は、当時のアメリカ医学の中心地であり、当時わが国に影響を及ぼしたアメリカ医学も同地のそれが中心となつている。（阿知波五郎氏の教示による）Maine の South Portland で1年間実地で従事。1872年4月10日 Maria Elizabeth Gobb と結婚。2人は直ちに日本へ出発した。アメリカ外国伝道局 American Board of Commissioners for Foreign Missions は最初 Berry を Spain に遣ろうとしたが、のち日本に変更したという。4, 500トンの車蒸汽船アメリカ丸に乗り、途中 Honolulu に寄り24日間で横浜に着いた。ただし、それが何月何日であるか、はつきりしない。（横川四十八氏は6月1日とし、竹中勝男氏、湯浅与三氏は5月27日とする。重久篤太郎氏に Japan Daily Mail あたりをみれば、アメリカ丸の入港月日が明らかになるだろうと教示を受けているが、未調査）

わが国のプロテスタント宣教は安政6年（1859）J. Liggins, C. M. Williams（ともに聖公会）J. C. Hepburn（長老派）S. R. Brown, D. B. Simmons, G. E. Verbeck（ともに改革派）などより始まつた。アメリカ外国伝道局は組合教会 Congregational Church 属し、1869年10月、Pittsburg で開かれた第

60周年会において日本伝道開始を決議し、これにより同年11月30日 D.C.Greene が横浜に上陸。翌年3月伝道の本拠を神戸として同地に移住。O.H.Guliek, J.D.Davis が1871年来日。Berry は組合教会からは彼らに次ぐ来日、つまり4人目である。ただし同会の宣教医は彼が最初。また関西に来た宣教医としても彼が最初。(来日宣教医は彼より先に J.C.Hepburn、横浜 D.B.Simmons 横浜、H.E.Schmidt 1860 長崎、D.B.Mc Cartee 1861 東京の各がある。また、組合教会よりは Berry 以後に M.L.Gordon 1872、A.H.Adams 1874、W.Taylor 1874 などが宣教医として来日) Berry は横浜で J.C.Hepburn の歓迎を受けしばらく滞在。横浜上海間就航の太平洋汽船会社の定期船で神戸着。ここで D.C.Greene と J.D.Davis に会い、一応 Davis 家におちついた。

II 神戸の時代

来神後まもなく、外人相手の神戸国際病院評議員会より、Berry を医務監督として招聘したい旨申し出あり。彼はこれに対して日本人患者の診療を行なわしめること、日本人患者のための病室を設けることを条件に承諾した。(同じころ、京都医師会がその病院の医長に招ぜんとしたが、Berry は府立療病院がドイツの医師——Junker von Langegg——をよぼうとしており、医師会がこれに対抗せんとする意志のあることを知り、この申し出を拒絶している)しかし、Berry は自由に日本人を診療することが望みであつたので、外人居留地外での診療の許可を県へ申し入れた。県から外務省へ問い合わせたところ、5月8日(新暦6月13日)付で回答が来た。これによれば、Berry の申し出は毎日居留地より出張して治療にあたるということで、居留地外に住むというのではないので、差支えないようであるが、これを許すと外人の他の業種も許さねばならなくなつたりするので、まず不許可がよからう。ただし、雇入れの形でなら許可してもよいとしている。さらに Berry は同年9月22日(新暦10月24日)付で、兵庫県令、神田孝平に対し、日本に特有と思われるたとえば脚気のひどきものの病因を知るために、死亡した囚人の病理解剖をしたい旨申し出た。県より外務省、さらに文部省へ2、3回文書の往復があつたのち、解剖のさい邦人医師のたちあうこと、解剖後の手厚い処置などの条件のもとに許可された。明治6年1月より兵庫県立神戸病院(院長 西春蔵)内に解剖所が設けられ、Berry と同病院の間に関係ができた。のち彼はここで診療を行なうようになる。

Berry はその後、万国病院を辞し、居留地内に生田病院を設けたが、明治6年3月19日山田俊策ら数名とともに神戸の多聞通3丁目に恵済院を開いた。15名の入院ができ、内科、外科、眼科の診療設備があつた。しるに兵庫県立神戸病院より、恵済院併合の話が出、Berry は西院長に公費にて貧民を救療する件など8条の条件を6月17日提示したところ、7月5日、

神戸県令の名で承諾の返事あり。同7日、恵済病院は神戸病院に併合された。Berry 著「治験録」（邦文、明治7年12月刊行）によれば、明治6年7月7日より、7年7月18日までの神戸病院における外来患者は1,603人。入院患者246人、うち死亡22人。滞院日数6,204日である。なお同書には入院患者数1人1人についての簡単な記述が表示されており、これはわが医学史に貴重な資料といえよう。さらにBerryは、明治6年から7年にかけて兵庫県下各地に診療旅行を行つている。いま「治験録」の記するところを主として示せば以下のごとくである。

1) 有馬 明治6年4月9日、有馬へ行く。（Berry いう、「実ニ日本ニ在テ医遊ノ初ナリ」）翌日患者多少を診療。1カ月後再訪。その後何度も同地を訪れたと。

2) 三田 明治6年8月訪。以後翌年7月までの施療患者370余名。うち施薬をなす者150名以上。9月20日第2回、10月20日第3回訪。9月のとき同地の医師などより、貧民のための病院を開く話が出、10月病床6、診察・待合室収容能力150名の恵済院発足。Berryはわが国において人民の協力によりできた恵済院はこれが初めてであろうといっている。彼は開院後も毎月同地を訪れたが、毎回患者は40名を下らなかつた。三田と組合教会の関係は深く明治8年7月には教会の設立をみている。神戸女学院の創立にも三田と関係が深い。そのはじめは旧幕主九鬼隆義とJ.D.Davisが明治5年に知りあつたことにある。その後のBerryの功績ももとより大である。当時の三田は九鬼隆義の他、川本幸民、白州退蔵を生むなど、進歩的であつた。

3) 明石 明治6年8月25日訪。以後毎月訪。明治7年3月8日、この地（材木町・法林寺）に恵済院開く。患者数毎回30名以上。施療患者約400。うち施薬80。明治8年閉鎖さる。

4) 加古川 明治7年1月加古川訪。3月8日恵済院発足。毎回患者100余名。施療患者約600名。施薬者50名余。

この他に「日本におけるベリ翁」によれば、明治7年6月より12月まで、毎月10日間づつ飾磨県管下会社病院へ通勤治療する契約をとりかわしている。さらに住吉、西宮、姫路などにも出向いたようである。一方、Berryは伝道の方でも活躍した。明治6年12月には神戸に日曜学校が開かれ、Berryがその校長になつた。これは日本語を利用した最初の日曜学校である。明治17年12月には組合教会最初の邦文讃美歌「いと高きにおいては」を編んでいる。木版摺、序文、松山高吉、歌詞、奥野昌綱、現在神戸女学院などが所蔵）。

明治6年ころ、神戸の監獄の囚人の治療にあたつたのに端を発し、わが国の監獄制度に深い関心を寄せ、明治9年8月23日には大久保利通内務卿に獄舎報告、ならびに改良見込書を呈している。この監獄改良事業は、Berryのわが国における仕事のうちで、もつとも高く評価されるものである。

Berry は明治10年4月、県立神戸病院を辞任し、第1回の帰国をする。4月17日、兵庫県知令、森岡昌純より感謝状が贈られている。帰国の理由の1つとして、この感謝状中に「貴下病痾ノ故ヲ以テ・・・」とあるにより、病氣であつたことが分るが、病名については不明である。

以上、Berry の神戸を中心とした兵庫県の在住は約5年であつたが、その活動はまことにめまぐるしいものがあつた。居住、布教などまだ、種々の制限のあつた当時にこれだけの働きをなしたことは驚くに足るが、官公にもつぎつぎと要求を出して解決していくあたり、彼の覇気が痛切に感じられる。ある意味でこの神戸の時代が、彼の生涯中でもっとも充実していたといえよう。

Ⅲ 岡山の時代

帰国した Berry は New York で医学の補習を受け、明治11年再びわが国を訪れる。明治12年3月、岡山県令、高崎五六の招きにより、Oti's Cary, James H. Pettee とともに岡山に移住、岡山県立病院の顧問となる。Berry と高崎の間にはすでに帰国前、岡山へ行く約束ができていたようである。高崎はひとり Berry に対してだけでなく、外人宣教師、ひいてはキリスト教に好意をもつていた。とくに Berry のことは大久保利通が同郷だつた関係で Berry 在神のころより知つていた(田中文男氏による)。一方 Berry は前述のように2人の外人宣教師を教育事業に従事させることを条件に岡山行きを承諾している。それより前、明治8年1月に岡山病院の医師たちから、Berry および Taylor の兵庫県下の活躍をきいて、ぜひ岡山病院を訪れて診療の實際をみせて欲しいという手紙が来ている(「日本に於けるベリー翁」p276)ところで、岡山にキリスト教の伝わつたのは明治8年ころで、明治9年4月 Taylor が同地に赴き、そのおりすでに彼は高崎に会い、高崎は病院担任のことを依頼しているが、定住のための旅券が交付されなかつたとかでこのことは沙汰やみとなつている。

その後 Taylor は明治10年3月にも同地を訪れている。明治11年11月には岡山にミッションステーションが設置され、Berry, Cary, Pettee と女教師 Wilson の4氏が駐在し、各自学校や病院に勤務することになった。明治12年2月日曜学校が開かれ、明治13年10月岡山教会が設立された。そして県下高梁、惣社、倉敷などにも伝道したが、Berry はこれらの地にも出張して医療に従事した。

Berry らは最初高崎の別邸へおちついたが、まもなく Berry の設計で、岡山市東山玉井宮下の景勝の地に洋館を建築した。これは岡山最初の洋式建築であつた。Berry は4月11日より岡山県立病院に出、内科・婦人科を担当し、人事面でも思いきつた改革をなした。

同年9月には情野勇が来て院長となり、13年には岡山県立病院付属医学教場が独立して岡山県医学校となり菅之芳が校長となる。なお、病院は栄町より弓の町へ移転、新築するがこれも Berry に負うところ大であつた。その他 Berry は下水工事や地区改正などにも意を用いた。

岡山における Berry についてさらに忘れることのできぬものに、岡山孤児院の石井十次との関係がある。石井は明治15年、岡山県医学校に入学。明治17年岡山教会で受洗。明治20年孤児救済に専念する決心をした。その動機の一つとして、かつて神戸監獄内で Berry の感化により更生した渡辺亀吉が、自分が犯罪を起したのも孤児であつて盗児の群に入つたためであることより、出所後神戸監獄の下級雇員として幼年囚懲治監の学業教育に従事中、ある冬2人の孤児が泣く声をきき、4円余の薄給の中から、この孤児をひきとつて養育した。その話を石井がきいたというのである。年次的に岡山における Berry と石井の直接の交渉はまずなからうが、後年の接触は考えられる。わが国の社会事業史に占める岡山の位置は小さくないが、これには Berry が有形無形に預つたところ少くないであらう。

明治15・16年ころ、Berry は岡山県立病院において2年1万人以上の患者の治療にあたつたというが、明治17年3月末、同病院との契約ぎれを機に、同病院の雇を辞し、第2回の帰国を行なうことになる。このころすでに彼は京都の同志社へ行くことを決心していたのである。

IV 京都の時代

明治15年、キリスト教信者中に神学教育と平行して医学教育をなすことが、伝道上重要との意見があり、新島襄、松山高吉の2人を委員としてその実行法を有馬に避暑中の Berry に相談した。翌16年、京都における組合教会内国伝道会社の年会で、再びこの議が上り、新島を学校側、松山を教会側の代表として改めて岡山に Berry を訪い、キリスト教主義医学校建設の指導監督に当らるよう懇請した。そして同年5月3日、Berry を招いて京都において、新島中村栄助ら数名が集り創立協議会を開いた。なお、これに先立ち京都中京の医師、大村達斉が建仁寺内に設立せる汎愛医学校を同志社に提供するという申し出があり、新島、中村らと商義したが、契約に至つて大村氏の食言あり、この話は流れたが新島は却つてこれに発奮、医学校設立の念にもえたという。

Berry は新島らの申し出を快く受け入れ、国内の宣教師に檄し、各般に説き、さらに明治17年3月より翌年9月まで2回目の帰国をなし、Philadelphia を中心に、同志社医学校および付属施設創立のための資金を募集した。これは大きな効果を収め、中でも英国の罐詰商モルトン氏は10万ドルの寄付をなしたが、当時わが国には外人より寄付を受けたときの寄付行

為に関する法規が整備されていなかったため、有効とならなかった。これが直接の原因ではないだろうか、結果として同志社に医学部はできなかった。そして同志社病院と京都看病婦学校が創立された。

もつとも Betty の考えは医学校にはまず病院が必要であり、病院には看護婦が必要だといふのであつたから、病院と看護婦学校の創立は予定のうちにあつたことであろう。ことに注目すべきは、当時わが国で看護婦の専門教育ということなどは殆ど顧みられなかつた中を、専任教育者による本格的な看護婦養成を行なつた点で画期的なものである。ことに彼がアメリカ外国伝道局に派遣を依頼した看護教育者には、アメリカ最初の資格看護婦 America's first trained nurse の栄をもち、当時市立 Boston 病院看護婦長兼看護学校監督であつた。Linda Richards (1841—1930) が、自らこれに応じて明治 19 年 1 月来日し、同 23 年 10 月帰国するまで、京都看病婦学校にあつて、大きな働きをなした。これはひとりわが国のみならず、世界の看護学史の上で注目されるべきことである。

看病婦学校の仮授業は同志社教師の Davis 氏宅の一部を借りて、明治 19 年 4 月より行なわれた。同年 9 月 Berry は大日本私立衛生会京都支会の席上で「京都看病婦学校創立に関する演説」をなした。これは看護教育に無理解者が多かつた中で、Berry が面談した内務省衛生局長、長与専齊が好意を示し、私立衛生会京都支部長 半井澄に紹介し、この演説となつたもので当日は長と局長も出席したという。この演説は看護婦の職業としての独立を認めた意味で、わが国においてとくに重要な意味をもつものである。この演説のためにあつて、国内よりさらに募金があり、その総額は 1,134 円 32 銭となり、これに外国寄付金 6,105 円 50 銭を加えて、土地、建物の購入、建設が行なわれ、明治 20 年には病室(病床 20)、看護婦宿舍(20 人収容)も完成し、同 7 月 20 日同志社病院、京都看病婦学校の設立願が京都府に出され、同 8 月 11 日認可され、同 11 月 15 日に開院、開校式を行なつた。第 1 回入学者は 5 名、うち 4 名が、2 年後の明治 21 年に卒業第 2 回は 13 名入学、7 名が卒業、この中には初代京大総看護婦長 不破勇子が含まれている。初代校長 新島襄、院長兼教師 Berry、教師兼看護婦長 Richards、さらに教師として Dr. Sara Craing Buckley、白藤信嘉、川勝原三などがあつた。

明治 20 年 4 月には英文の "The First Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses" を出しているが、これは Berry の筆になると思われる。創立経過について記したあと、入院、外来患者の統計と特殊な症例の報告を行ない、病院、学校の平面図を付している。その後、明治 24 年 10 月の濃尾大地震のときには、早速 Berry は看護婦とともに救援におもむいた。このときの記録は明治 25 年の "The Sixth Annual Report" にある。なお、この年報によればこの 1 年の入院患者

200 名、外来患者 6,078 名である。

Berry は明治 26 年 10 月、わが国を離れて Wien に行き、眼科・耳鼻咽喉科の補習を行なっている。これは同志社をとくに当時わが国で未だ分化の進んでいなかった耳鼻咽喉科のセンターにするつもりであつたという。しかるに Wien で一冬を送つて帰米した Berry にまもなく届いた通知には意外にも、Berry が同志社病院へ戻つたら院長を解任し、一職員として遇するという内容であつた。ここに至つて彼は同志社を辞職し、ついにそれ以後わが国に定住することはなかつた。

Berry は同志社においても最善を尽したが、結果はかくのごとく不満なものであつた。これについて彼自ら以下のように述べている。

「ご存知のことでしょうが、当時新島氏と松山牧師が岡山に私を訪ねて来られ、英国および米国のもつとも優秀なる医学を教えるために、キリスト教の精神に基く医学校を建設するについて、私にその指導監督の任に当つてくれるようにと懇請されました。（中略）しかし不幸にして私達はそのすべての方面において、心からの協力一致をみるというところまでは行きませんでした。それで私の大きな計画案は廃棄されてしまいましたが、ともかくも同志社病院と京都看病婦学校とが建設されました。すべてはアメリカ伝道局の援助と同志社の協力とによつてできたものです。」
「しかしご存知のように、当時の事情は、私が日本に帰ることを許さないようなことになつてきましたので、私はやむを得ず、そのままアメリカに留まつていました。」

もし、最初の計画とおり同志社に医学部ができ、それが現在まで続いていたとすれば、これはわが国唯一のキリスト教系医学校ということになるのであるが、とにかく当時の状況はこれを許さなかつた。これは①経済的事情、②当時、公私の医学校多数が濫立し、整理を必要としており新設は認められにくかつた。③わが国の医学がドイツ医学を主にすることに決定していた。などが理由としてあげられるが、このさいさらに忘れることのできないのは明治 23 年、新島襄の死亡とその後の同志社の内部事情であらう。新島の死はひとり Berry のみでなく、折角新風を起した同志社病院や京都看病婦学校の土台までを揺がしたとみることができよう。（ただし、京都看病婦学校は明治 24 年に同校に就任し、Berry とも親しかつた佐伯理一郎氏によつて管理され、明治 39 年よりは全く佐伯氏の手に移つた）。

V 帰米後

帰米した Berry は明治 28 年、Massachusetts 州、ついで Maine 州の開業試験に及第、明治 26 年来 Massachusetts 州 Worcester 市市民病院で、眼科・耳鼻咽喉科の診療に従事した。

しかるにわが国の知人たちの文通もその後ややとだえたのもであらうか。Berry のこ

とはいっしか世々の記憶からも遠ざかったのであるが、帰米後 17 年目の明治 43 年、ワシントンで開かれた万国監獄会議に出席した小川滋次郎博士が、10 月 6 日、食卓演説でわが国の獄制改良の沿革について述べ、この中で Berry のことにも触れたところ、翌日新聞でその記事を見た市民が、氏に Berry 健在の旨伝えて来た。小川氏は Berry と未知の間柄であったが、連絡の結果 10 月 16 日に Worcester で彼に会うことができた。これが機縁となつて、わが国の知人との文通などが激しくなり、大正元年 9 月 12 日には勲 3 等瑞宝章が、贈られることになるのである。そしてこれに対する感謝の意味と、アメリカ外国伝道局の 1 員としての東洋視察の意味で大正 7 年 7 月 25 日、久方ぶりにわが国を訪れ、各地の歓迎会にのぞみ講演などを行なつている。

その後も Worcester で診療を続けていたが、緒方富雄氏が Berry に会い「1935 年わたくしは、ふとしたことからアメリカの Worcester 市で Dr. Berry にひきあわされた。耳の遠い Dr. Berry は東京に地下鉄のできたことを、おどろいていられたのをおもひ出すとその印象を記している。（「医学のあゆみ」12 巻 4 号、昭 26）」

昭和 11 年（1936）2 月 8 日、Worster で死亡した。89 歳。

Berry 研究の現状

以上、主としてわが国にいたころの Berry についてそのあらましを述べたのであるが、この Berry の研究については従前必ずしも十分なものがあるとはいえない。

まず彼の著わした書物であるが、これが案外少ないようである。本稿で紹介した「治験録」（明治 7 年）はその数少ないものの 1 と思われるが今まであまり紹介されていない。ただしこの本が当時の医人にかかりの影響を与えたことは明治 8 年 1 月京都療病院医員、新宮涼介、半井澄ら 8 名の Berry に対する感謝状（「日本に於けるベリー翁」p 277）よりも知られるのである。もう一つは著書とするには難があらうが、これも本稿で紹介した英文の同志社病院、京都看病婦学校の年報である。私はこれの第 1 と第 6 を見るを得たが「治験録」とともにいずれも旧故佐伯理一郎蔵書、現中野操所蔵によるものである。その他、Berry は明治 8 年——16 年、神戸で Gulick らにより発刊された「七一雑報」でその第 1 号に「各自め養生法」を記した他、「空気を通す事」「空中を温暖にする事」「夏時小児を保育する事の作法」「家屋建造についての保健法」などを記している由（竹中勝男氏による）だが未見である。その他英文によるミッションの報告が数篇あるようだがこれも重久篤太郎氏にコピーしていただいた。Berry が Japan Evangelist に寄せた論考を Frank Cary が抜萃して The Japan Christian Year Book 1959 に登載したものを知るのみである。他に書簡、演説、目叙伝などが「日本に於ける

ベリー翁」に収録されている。Berry 編の邦文讃美歌については前述した。さて Berry についての伝記、研究であるが、もつとも重要なのは大久保利武編著「日本に於けるベリー翁」（昭4・東京保護会）である。ついでその娘 Katherine Fiske Berry; A Pioneer Doctor in Old Japan—The Story of John C. Berry 1940 がある。この2著は完全な伝記の態はなしていないが、貴重な資料もとりにてあり、単行本として邦文、外国語で各々唯一のものである。

Berry 研究について、私が見得たもののみをあげればつぎの各々がある。

- 1 竹中勝男 本邦近世社会事業の先駆者としての宣教医 基督教研究 15巻1・2号
昭12 中のBerry に関する項
- 2 佐伯理一郎 京都看病婦学校五十年史
昭11
- 3 佐伯理一郎 幕末及び明治に於けるアメリカ医師の活動に就いて 基督教研究 24巻1号 昭25 中のBerry に関する項
- 4 田中文男 蘭医ロイトル・ボードイン及米医ジョン・ベリーの事共 総芸 30—32号
昭30 中のBerry に関する項
- 5 守屋 茂 岡山県看護事業発達史稿 岡山県看護事業史調査会 昭36
昭36 中の Berry に関する項
- 6 松田 睦子 看護婦の創生と京都看病婦学校 立命館文学 221号 昭38
- 7 湯浅 与三 基督にある自由を求めて——
日本組合基督教会史—— 昭33

【付】 Berry の日本人交友関係（アイウエオ順）

石 井 十 次	浮 田 和 民	大久保 利 通
大久保 利 武	大 沢 善 助	川 本 泰 年
河 本 乙五郎	神 田 孝 平	北 垣 国 道
木 村 強	九 鬼 隆 義	佐々木 和 助
佐 伯 理一郎	滋 沢 栄 一	高 崎 五 六
中 村 栄 助	生 江 孝 之	新 島 襄
八 浜 徳三郎	林 市 蔵	原 昭
原 田 貞 吉	牧 野 伸 顕	牧 野 虎 次
山 田 俊 郷	山 田 良 斉	横 田 四十八
若 林 元 昌	若 林 元 益	渡 辺 亀 吉

お わ り に

私はさきに「初期来日米人宣教医」なる小稿を発表した。(研究報告第8号 昭39)本稿はその各論の一ともいえるもので、John C. Berry について述べたものである。ただ、不勉強のためと時間の制約もあり、今回はただその略歴を述べるにとどまつた。今後、さらに研究を進めて明治期の1外人のわが国の医療、教育、伝道に占めた位置などについて巨視的な観察を行なうことが必要であると思う。皆さんの御高教を乞う次第である。

おわりにのぞみ種々お教えいただいた重久篤太郎先生に感謝するとともに、貴重な文献をお貸しいただいた阿知波五郎、武藤誠、中野操の各先生にお礼を申し上げます。

〔付〕 拙稿「初期来日宣教医」(研究報告 第8号 昭39) p6 〃 来日宣教医一覧中の(Ⅱ) Eliza Talcott は医師ではなく、私の誤でしたのでとりけします。〔英学史研究会第3回支部例会にて発表 1965. 10. 30 〕

英学史研究会関西支部第3回例会にて発表 (1965. 10. 30)

本稿は昭和40年度文部省総合科学研究費——本邦における英学導入史の研究——による研究協力による一部である。